

音読・暗誦される児童文化財

— 百人一首カルタ考 —

On One Hundred Poets, One Poem Each as Children's Cultural Asset

木内英実

Hidemichi Kinuchi

要旨

百人一首競技カルタの隆盛を背景に、近年漫画・映画においてもその様子が描かれることが多い。半澤敏郎による『童遊文化史』『カルタ』の章に「歌カルタ」として百人一首が、「いろは警カルタ」が掲載されたように両者は伝統的な児童文化財に位置づけられる。明治から昭和初期にかけての子どもがカルタで遊ぶ場面三例を概観すると、中勘助の作品『銀の匙』には、音声として、歌を家族による口移しで誦む場面、絵札によってその言葉が持つ意味イメージを広げる場面が描かれ、子どもの想像力が家庭教育で涵養される様を示された。百人一首は小・中・高と高学年になるほど遊ぶ楽しさから離れ、「難しい」「つまらない」ものへと変貌する傾向があり、遊びの前提である百の和歌を暗誦すること、遊ぶ際にも読み札が読まれる音を聞いて取り札を取ること、という複雑な過程があるにもかかわらず、児童文化財として継承されてきた要因として、絵本の読み聞かせに通じる音読の効果が挙げられる。

キーワード：百人一首カルタ 児童文化財 音読 文学作品

一、はじめに

(一) 百人一首への高い関心の背景

百人一首競技カルタにかける高校生の青春を描いた漫画『ちはやふる』（末次由紀、講談社）が女性アイドルを主役として実写映画化（「ちはやふる 上の句」平成二八年三月公開「ちはやふる 下

の句」同年四月公開）されたことを追い風に小中高生を中心に百人一首への関心が高まり競技かるたへの参加人口も急増している。

半澤敏郎による『童遊文化史』第二卷（昭和五六年六月、東京書籍）の「カルタ」の章冒頭に「歌カルタ」として百人一首が掲載されたことが示すように、百人一首は「歌カルタ」の一種として児童文化財に位置づけられる側面を持つ。英国ではマザーグースの伝統

を背景に、良い子どものための詩の条件としてハーバード・リードの指摘による「マジック・アンド・ミュージック」(瀬田貞二著『幼い子の文学』中公新書、昭和五五年)の有無が議論されてきたが、音声として、歌を家族による口移しで読むこと(口誦文芸的側面)、絵札によってその言葉が持つ意味イメージを広げること、これら百人一首を子どもが覚える過程は、絵本の読解にもつながる聴覚と視覚を用いた子どもによる文芸理解の初期段階に重なると考えられる。本論は、文学に描かれた百人一首カルタの児童文化財としての側面に照射しその位置づけを考えることを目的とする。

(二) 文学や漫画に描かれた百人一首カルタ

前節で述べたように各種文学・漫画作品のモチーフに取り上げられた百人一首カルタ一覧を次に示す。但し注釈書及び百人一首の続編「異種百人一首」、パロディ作品は除いた。

【古典落語】

初代桂文治「ちはやふる」安永五年

初代桂文治「崇徳院」詳細な成立年不明

【小説】

尾崎紅葉「金色夜叉」明治三〇年一月〜明治三五年五月(初出『読

売新聞』)

石川啄木「鳥影」明治四一年一月〜同年二月(初出『東京毎

日新聞』)

田山花袋「田舎教師」明治四二年初版発行

永井荷風「見果てぬ夢」明治四三年一月(初出『中央公論』)

中勘助「銀の匙」大正二年四月〜同年六月(初出『東京朝日新聞』)

夏目漱石「こゝろ」大正三年四月〜同年八月(初出『朝日新聞』)

堀辰雄「かげろふの日記」昭和一四年初版発行

丹羽文雄「青麦」昭和二八年初版発行

石川達三「悪の愉しさ」昭和二九年初版発行

伊藤整「若い詩人の肖像」昭和三一年初版発行

大岡昇平「花影」昭和三六年初版発行

三島由紀夫「午後の曳航」昭和三八年初版発行

【推理小説】

山村美紗「百人一首殺人事件」昭和五三年初版発行

横溝正史「小倉百人一首」(人形佐七捕物帳シリーズ)昭和五九

年初版発行

斎藤栄「女子大生短歌殺人事件」昭和五九年初版発行

山村美紗「紫式部殺人事件」昭和六二年初版発行

内田康夫「歌枕殺人事件」平成二年初版発行

高田崇史「六歌仙の暗号」平成一一年初版発行

【ライトノベル】

新井素子「通りすがりのレイデイ」昭和五七年初版発行

【漫画】

大和和紀「はいからさんが通る」昭和五〇年第一巻初版発行

藤原栄子「うわさの姫子」昭和五〇年第一巻初版発行

山本鈴美香「エースをねらえ！」昭和五三年第一巻初版発行

魔夜峰央「パタリロ！」昭和五六年第一巻初版発行

里中満智子「アリエスの乙女たち」昭和五八年第一集初版発行

北条司「シティーハンター」昭和六二年第一巻初版発行

室山まゆみ「どろろんぱっ！」平成元年第一巻初版発行

片山愁「あやかし歌姫かるた」平成一二年第一巻初版発行

末次由紀「ちはやふる」平成二〇年第一巻初版発行

杉田圭「うた恋い。」平成二二年第一巻初版発行

二、百人一首カルタ概要

(一) 百人一首の歴史的背景

成立に関する諸説^①即ち、①藤原定家が自ら撰んだという説②蓮生が撰歌して、定家に書写させたという説③宗祇が実際撰歌し、それを定家が撰んだ如く装ったという説は、昭和に六年に宮内庁書陵部蔵『百人秀歌』の紹介によって、①説が有力となった。中世期以降、注釈書が出版され、近世期以降は版本の大量出版に伴い、古典歌鑑賞、書道手本等女子教養書として「絵入百人一首」が広く流布した。^②
百人一首カルタとしては、「近世におけるかるたは、上の句札と下の句札に分かれていること」が特徴的であり、「歌を完璧に記憶していなければ、(中略)読み手にしても下の句まで読めないわけである。そのためにかかるたには、小型の百人一首絵入り版本(添本・読本)が添えられていた」という。明治三七年、平仮名の活字を用いた標準かるたが出版されたことに伴い、東京かるた会という競技かるたの団体が誕生した。その構成員は男性であった。

(二) 児童文化財としての百人一首かるたの歴史的背景

百人一首カルタを遊びの一つとして捉えた民俗学的研究成果としてまとめられた前掲書『童遊文化史』の内容をまとめると天保四年刊伊勢貞丈『貞丈雑記』に「歌かるたといふ物は古なし 近代出来

たる物也 本は貝おほひの貝より思ひよりて作りたる故 本名をば歌貝と云也」とあるように、「貝おほひ」「歌貝」を元とする説が有力である。そもそも「歌カルタ」とは百人一首以外にも「伊勢物語絵入り歌カルタ」等、「歌でもって内容構成したカルタ」であり「古典歌を教養の一つとして覚えるために創作されたもの」である。「小倉百人一首カルタが最も一般大衆化された歌カルタとして行われてきた」ことを背景に「歌カルタの代名詞的存在として今日に至っている」ことに異論はない。

カルタという名称は室町時代末期から江戸時代にかけて南蛮人(ポルトガル人・スペイン人)の渡来によってもたらされた紙に書きつけた、英語の chart と card に当たるといふ。つまり貝が chart または card に代わり、「歌カルタ」が生まれたと言われる。

近世女子教養教育を背景に一般大衆化された百人一首カルタが児童文化財として位置づけられた要因として、いろはカルタの存在が挙げられる。

三、子どもによるカルタ受容の概要

(一) 児童文化財として文学作品に描かれたカルタ

明治期・大正期・昭和初期の子ども時代を綴った自伝的文学作品・記録・随筆において両者はどのように描かれてきたのか、次に確認する。

①明治一八年生まれの著者が自らの子ども時代を描いた自伝的小説、中勘助著「銀の匙」大正二年四月〜同年六月(初出『東京朝日新聞』)

伯母さんはまた百人一首の歌をすっかりそらんじてゐて、床へはひつてから一流のものさびしい節をつけて一晚に一首二首と根気よくおぼえさせた。伯母さんが

「たちわかれ」

といふ。私が

「たちわかれ」

とあとをつく。

「いなばのやまの」

「いなばのやまの」

「みねにおふる」

「みねにおふる」

そんなにしてるうちにいつか寝入つてしまふ。よくおぼえたときは

「あした御褒美をあげるにまあねるだよ」

といつて叩きつけてねせてくれる。私が歌をはやくおぼえるのをたいへんなえらい子でもあるかのやうに思つて伯母さんは明る日母などに

「ゆんべはふたあつもちつきにおぼえた」

なぞと自慢らしく話したりした。私はわからぬながらも歌のなかの知つてる言葉だけをとりあつめて臚げに一首の意味を想像し、それによみ声からくる感じをそへて深い感興を催してゐた。そのじぶん私は古い歌がるたをもつてたが、それには一枚のふだのなかに歌と歌にあはせた絵がかいてあつて、けばだつて消えかかつてはゐるけれどそれでも松に雪のふりつもつてるところや、紅葉のしたに鹿の立つるところなどほんやりと見

わけられた。また百人一首の綴り本もあつた。歌の好き嫌ひはかるたの絵とよみ人の姿、顔かたちによつてもきめられる。好きな歌は末の松山の歌、淡路しまのうた、大江山の歌など。末の松山のうたは私の耳にいひしらぬ柔なものさびしい響きをつたへて、かるたの絵には松の浜に美しく波がよせてゐた。淡路島の歌は涙をさそふ。海のうへを舟がゆき、千鳥が飛んでゆく。大江山の歌をきけばお姫様が鬼にとられてその山奥へつれられてゆく草双紙の話を思ひださずにはゐられなかつた。僧正遍照や前大僧正行尊などといふ皺くちやの坊さんは大嫌ひだつたが蟬丸だけは名まへからも可愛かつた。

〔前篇十八〕『中勘助全集』第一巻、岩波書店、平成元年）

お医者様のすすめにしたがつてとかく弱りがちであつた母と私の健康のために父は二人をつれてある海岸へゆくことになつた。行く路すがらそれまで歌がるたの絵や粉本などでみて子供心にあこがれてた自然がそのまま目のまへにあらはれてくるのを見て私はむしろ喜んで。

〔前篇三十九〕『中勘助全集』第一巻、岩波書店、平成元年）

②明治三二年生まれの商家の息子から聞き書きした室内遊びの記録より（出典 藤本浩之輔著『聞き書き明治の子ども』本邦書籍、昭和六一年、収録「船場の記録少年 牧村史陽さんの話」）

小学校時代で記憶にある遊びというのは「どんどん」といふまり当てですな。（中略）

わたしは、もうスポーツはきらいで、外で遊ぶより家で遊ぶことが多かったんです。友だちが家へ遊びに来たり、妹たちと遊んだり……。

カルタは、「百人一首」や「いろはカルタ」をやりました。大阪のカルタはね、「石の上にも三年」というのですが、日露戦争を境にして「犬も歩けば棒にあたる」、つまり「犬棒カルタ」に変わってきたわけですね。それまでの大阪のカルタは、いわゆるザラ紙の大きい一枚に印刷してあって、それを切ってカルタを作った。それが、一枚ずつに印刷してある東京式の立派なものに変わったんです。ええ、ええ、大阪式のは薄い紙だったです。

〔妹たちと室内遊び〕一七九頁〕

③昭和二年生まれの著者が富津市で過ごした子ども時代の遊びについて回想した随筆作品より（出典 中嶋清一著『子ども歳時記』夢工房、平成元年）

「いぬも あるけば ぼうにあたる」

「ろんより しょうこ」

「はなより だんご」

これは「いろはかるた」で、遊び方は一人が読み札を読むと、その頭文字の「い」「ろ」「は」だけ印刷された取り札を、みんなで競って取る。子どもの頃は、かるたを文字で取るよりも、取り札に書かれている面白い絵をおぼえ、その絵を見て取る方が多かった。

わからないことばもあった。「われなべにとじぶた」とか「つ

きよにかまをぬく」というのがあった。「われなべ」の絵札は割れた鍋でなく、ふちのかけた鍋で、「とじぶた」は閉じ蓋でなく、綴じ蓋で修理した蓋のことで、似合いの物の取り合わせの意であり、「かまをぬく」は「ぬかれる」とられる」ことで、闇夜ならまだしも、月夜に大事な釜をぬかれるほど間抜けの意味だと教えられた。

「かるた」は、暮になると駄菓子屋の店先に並べ売られている。年賀の客からお年玉を貰ってしまうと、客の座敷を避けて陽の当たる縁先などで、年賀にきた客の子どもや、兄弟姉妹などといっしょになって夢中で、かるたとりをやった。取り札を一番多く取った者が勝ちだった。かるた遊びは正月の遊びであった。

〔かるた・すごろく〕一四一―一五頁〕

昔から、君津市久留里地方は城下町という土地柄のせいか「百人一首」遊びが盛んであった。正月になると、宿もちまわりで二十日正月頃まで、毎日毎日年寄りも子どもも宿に集まり、座敷中に札をばらまき、とりっこをした。あきると「坊主めくり」をした。

百人一首カルタには絵のあるものもないものがある。読札に絵が入っているのは、読人の肖像は男六十六、姫二十一、坊主十三となっている。

円座を組み、円の中央に絵札を裏にして積み上げ、回り順、取り順を決めて始める。めくる人は一番上の札をめくり、皆に見せる。男と姫の絵ならば手元に置き、坊主だと絵を上にして捨てる。二回、三回と回ってくるが、坊主絵に当たると手許マの

札をいっしょに出す。次の者は男絵、次も男絵、何番目かに姫絵が出ると、姫絵を当てた者が坊主といっしょに投げ出されている札全部を取る。こうして、百枚の札がめぐり終るまでつづけられる。最後に各自持っている手元の取り札を数え、多い者が勝ちの順を決める。

勝っているとはひそかに心中考えていても、最後に一枚残った札が坊主絵で、せっかく集めた札全部出さなければならなかった残念さ、無念さが残る「坊主めぐり」のはなし。

〔坊主めぐり〕一七頁

①には一、(二)で指摘した、「音声として、歌を家族による口移しで誦むこと(口誦文芸的側面)、絵札によってその言葉が持つ意味イメージを広げること」の具体的場面が描かれている。さらに実際の自然と絵札の絵のイメージを重ね合わせて世界を認識している様子が描かれた。

②・③の作品では、「百人一首」と「いろはカルタ」は分けて扱われている。共に家庭内、広くは地域において対象年齢をあまり特定しないで遊べる児童文化財として認知されていた様子が描かれている。「百人一首」については、③に「年寄りも子どもも宿に集まり」とあり、世代を超えて遊ぶ「城下町という土地柄」に基づく教養教育の一環としての位置づけが示された「坊主めぐり」の遊び方も好まれたと描写された。

(二)「百人一首」暗誦の家庭教育としての側面

斎藤孝は著書『声に出して読みたい日本語』(全三巻)の中で田

村將軍堂「小倉百人一首」を各巻(『声に出して読みたい日本語』八首・第二巻七首・第三巻八首)に収録し、次のような解説を加えている。

小倉百人一首は今も日本語の暗誦メニューとして横綱級だろう。百に絞られている点もさることながら、カルタになっていることが大きい。昭和三十年代までは家族で正月に百人一首カルタで遊ぶのはよくある光景だった。ちなみに今でも坊主めぐりのスターは蟬丸(頭が隠れている坊主)のようだ。

〔声に出して読みたい日本語』草思社、平成一三年)

庶民が『百人一首』を暗誦していた時代があった。眠りに落ちる間に話された言葉は脳の奥深くに届く気がする。子どもは眠るまでくり返し同じ絵本を読んでもらうのが好きだ。あまりに話が面白いと眠れない。定番が入眠メニューには適している。意味がよくわからない言葉が混じっているほうが面白い。はやけた頭の中で想像力が働き、意識的には想像できないイメージが夢のように湧きあがるからだ。誤解もまた楽しい。言葉によって映像が頭に浮かんでくる。これはじつに人間らしい想像力だ。中勘助の『銀の匙』(二〇五頁を参照)には、伯母さんから寢床で『百人一首』を口移しに教わる場面が出てくる(次頁を参照)が、やはり蟬丸は名前からして強い。

〔声に出して読みたい日本語2』草思社、平成一四年)

斎藤は三、(二)①で取り上げた中勘助の『銀の匙』「前篇十八」

の場面を例に、子どもにとつての入眠時の百人一首暗誦と絵本読み聞かせとの類似点を、言葉↓映像イメージという想像力にあると指摘した。

では、子どもが百人一首暗誦と絵本読み聞かせをとの類似点をどのようにとらえていたのか、を示す例として、中勘助が自身の子ども時代を回顧した随筆「花さか爺」を次に示す。

まったく奇異でもあり不幸でもあるこの私の生涯もその最初の一頁は世間なみに「花さか爺」からはじまる。ずっと若い読者のために老婆心の蛇足をそへるならば、それはそのじぶんの子供の誰もが危なげな足もとをしまづぐる第一の童話の門だつたのである。トランプの札をひとまはり大きくしたぐらゐの本の、表紙にだけわりあひいい和紙を使つて子供の眼をよるこばすやうな色ずりにし、なかは紙とは名ばかりの粗悪なもの木版ですつてあるのだが、挿絵が粗末なばかりでなく絵ときの字が草双紙のそれとおなじ古風なもので学校へあがつてからでもろくに読めはしなかつた。浅葱の大黒頭巾をかぶつた花さか爺が笊を小腋に抱へて灰をまけば正直の報い忽に現はれて枯木に爛漫と花がさいてゐる。めでたし めでたし 美しいとして爺さんの唇が紅をさしたみたいに赤くて皺くちやな顔がへんに若く見える。仮に周囲との関係の無事安穩を幸福といふならば、子供の身になつてみればそれ相應の不満もあらうけれども幼弱無智な者として何事も寛容され、いはゆる子供扱ひにされるこの童話時代がいちばん幸福なのではあるまいか。殊に私は生来虚弱で智慧の遅い子と見られ。子煩悩で絵ときの上手な

伯母さんが世話をしてくれたのだからその種の幸福については最も恵まれたはずなのだけれども、運命はなかなかさう簡単に幸福を授けてはくれなかつた。(中略)

私は古い歌ガルタをもつてゐた。それはたくさん札がなくなつて役に立たないためカルタとりのお仲間になれない私の専用になつたもので、字のよめない私はそこに消えぎえに残つてる絵でとるのだつた。といつても歌も数へるほどしか知らないのだから五枚か七枚もとれたらうか。大抵は伯母さん相手に、時をりは上の姉が相手をして拾はせてくれた。それは楽しかつた。まったく楽しい遊びだつた。自分では一人前のつもりだし、それに黄と藍であつさりかいた絵がともも気に入つてゐた。すれて、けばだつて、朦朧とすることなどはなんでもない。一粒の石を山にも見立て、一本の草の芽を大木にもして遊べる子供である。家の周囲だけしかしらない私にもカルタの絵で見る海や山、船や鳥でつくられる不思議な世界があつた。

〔中勘助全集〕第一巻、岩波書店、平成元年〕

思考回路が十分に育っていない発達状況下で、子どもに一種の唱え言葉のように文章を暗誦させる教育方法の是非について、幼児教育学界では議論されることがある。その文脈において斎藤が暗誦・朗誦の復権を説いた前掲書『声に出して読みたい日本語』シリーズのメソッドも議論の余地はある。

しかし、その一方で「絵ときの上手な伯母さん」が「私」に示した文字認識以前の「花さか爺」童話本の世界は、「挿絵が粗末」であつても「子供の眼をよるこばすやうな色ずり」の表紙に描かれた

「爺さんの唇が紅をさしたみたいに赤くて皺くちやな顔がへんに若く見える」と描写されるように、伯母さんの絵ときによって、言葉と映像理解が同時に深まる児童文化財になり得ている。

さらには「字のよめない私はそこに消えぎえに残つてる絵でとるのだつた。といつても歌も数へるほどしか知らないのだから五枚か七枚もとれたらうか。(中略)それに黄と藍であつさりかいた絵がとても気に入つてゐた。すれて、けばだつて、朦朧としてることなどはなんでもない。一粒の石を山にも見立て、一本の草の芽を大木にもして遊べる子供である。家の周囲だけかしらない私にもカルタの絵で見る海や山、船や鳥でつくられる不思議な世界があつた」と、百人一首カルタ遊びの前提としての歌の暗誦がカルタ絵の理解を伴うものであり、見立てる想像力が子どもを大きな外界の世界認識に導くことが示された。この事例から、斎藤が述べた百人一首暗誦と絵本読み聞かせとの類似説の妥当性は確認できた。

(三) 学校教育教材としての百人一首

学校教育でも、百人一首暗誦をもとにした教育がなされていることが次の事例から理解される。

「小学校一年生の宿題『現代詩と古典の音読』の学習効果」(小林則雄・土井進著、『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』九号、平成二〇年)は、長野市立青木島小学校一年生二六名に毎日A4版片面一枚のプリントに音読用の詩を掲載したものを宿題として課した実践結果である。音読用の詩の中には「百人一首のかるたとりをやってみたいと、百人一首もいくつか提供した」とある。その結果得られた知見として「低学年でも古典に親しむことができ

ると分かった。音読は声に出して読むことにより、本人及び周囲の者との良好な関係が構築する力があることが分かった。」ことが挙げられた。

三、(一)①で既出の中勘助著『銀の匙』を灘中学校三年間の国語科授業で読み通す「奇跡の授業」実践をまとめた『銀の匙』の国語授業(岩波書店、平成二四年)で橋本武は、『銀の匙』には、子どもの遊びがたくさん出てきます。知識としてわかっただけではいまひとつ実感できない。実際にやってみました。たとえば『百人一首』。新年最初の国語授業は、百人一首カルタ大会としました。教をいくつかのブロックに分けて、机を寄せ集めて団体戦をやる。その後には個人戦。団体をやる時に人数がうまく揃わず、はみ出る生徒がいたら、読み役をやらせよう。きちんと同じ人数で割り振りができれば、私が読み役を務める。団体戦の勝ち組には鉛筆一本づつ、個人戦で一位になったものも鉛筆一本、これがご褒美です。」とある。

これは二田貴広がいう「百人一首の『暗唱』のよさと、カルタとして楽しめる娯楽性」(「教育の場でどう扱われているか」『国文学百人一首のなぞ』二月臨時増刊号、学燈社、平成一九年)に着目した実践である。同論で二田は当時の中学校国語教科書及び高等学校「古典」「国語総合」教科書に収録された百人一首所収歌調査結果を示した。中学生が「歴史的仮名遣い、和歌のリズム」を「訳、鑑賞」を一度も行わず体得した結果、「古文に親しみ自ら学ぶ態度が育まれている」という記録もある。一方、高校では「古語・文法・表現・口語訳・解釈・鑑賞・文学史」も学ぶ必要があり、「楽しい」はずの百人一首が、とつぜん「難しい」「つまらない」ものへと変

貌する、学びの接続性に二田は注目した。

四、いろはカルタの現在の位置づけ

三、(一)②③に登場したいろはカルタは、前掲『童遊文化史』『声に出して読みたい日本語』、及び『灘校・伝説の国語授業』(橋本武、宝島社、平成二六年)においても取り上げられている。三、(一)②には、大阪式と東京式二種のいろはカルタの存在が指摘されているが、『童遊文化史』では、〈江戸〉〈大阪〉〈京都〉の三種、『声に出して読みたい日本語』では江戸・京都の二種、『灘校・伝説の国語授業』では「京都に起こって上方地方で行われたもの」「中京で変化し諸国で行われたもの」「江戸において改められ一般的になったもの」の三種が掲載された。いろはカルタは「いろは歌」の四八字を頭とした俗諺の四八句を、それぞれの読み札と取り札(絵札)2枚に書き、九六枚に仕立てたものである。江戸時代末期から流通していたと考えられる。

『声に出して読みたい日本語』には、斎藤による「いろはかるたは、日本のことわざの精髓とされる。戦前は今とは比較にならぬほど大人も子どももいろはかるたで遊んだ。かるたのことわざは家庭や社会の生活規範の役割も果たしていたと考えられる。『岩波ことわざ辞典』の著者の時田昌瑞は、子どもたちへの公の言葉として教育勅語があったとしたなら、庶民の生活のなかから生まれた言葉としていろはかるたがあったと言う。」という解説が付された。庶民の知恵の結晶として人口に膾炙する上で、大人も子どもも遊ぶカルタという形式が非常に有効であったと考えられる。

五、考察

日本の固有の児童文化財としての百人一首カルタ及びいろはカルタには、それぞれに古典歌の教養を伝承する、庶民の生活のなかから生まれた知恵(諺)を伝承するというそれぞれの意味があるものの、読み札と取り札(絵札)二枚一組という形式、読み手が読み札を音読し、それを聞いた取り手が取り札を探して取るという遊び方は共通する。遊びのさなかにも音読が要となる。

百人一首カルタの場合、百歌の暗誦が遊びの前提であり、遊ぶ前に歌の音読を繰り返し返し、そのことばのリズム感や歌の持つイメージと関連させて歌を覚える。ここでも音読が要となる。和歌詠唱は宮中歌会始でも明らかのように、古い由緒を伝える日本の古典文芸作法である。和歌詠唱を児童文化財の一つである百人一首カルタが現代に伝承していることは、日本の児童文化の格調高さを物語ると言えよう。

音読を介しての暗誦の過程は、斎藤が指摘するように言葉↓映像イメージという想像力の涵養において、絵本の読み聞かせと共通する。日本において、昔話など子ども向け読み物の歴史は古い一方で、絵本の誕生が遅れたのもこのカルタと百人一首絵入り版本の存在があったからではないかと推測される。

註

(1) 有吉保「百人一首と私」『別冊太陽 百人一首への招待』(平凡社、平成二五年)一六八頁

(2) 吉海直人「百人一首」かるたの謎『国文学 百人一首の謎』二月臨時増刊号、学燈社、平成一九年、二二―二五頁

(3) 吉海直人「広がる百人一首の世界」『別冊太陽 百人一首への招待』(平
凡社、平成二五年)一六〇頁